

千葉市房地遺跡・房地古墳

—平成17・18年度—

2008

例言

1. 本書は、千葉市稻毛区に所在する房地遺跡と房地古墳の発掘調査報告書である。
2. 房地遺跡の発掘調査は公園造成に伴うもの、房地古墳の発掘調査は公園整備に伴うもので、財團法人千葉市教育振興財団が千葉市より委託を受けて実施した。
3. 本書に所収した遺跡の所在地・調査期間・面積・担当者は次の通りである。
 - (1) 房地遺跡
 - ① 所在地 稲毛区宮野木町 1980-1 の一部他
 - ② 調査期間 平成 18 年 6 月 8 日～平成 18 年 9 月 29 日
 - ③ 調査面積 上層 766 m² / 7,638 m² (確認調査)
 - ④ 担当者 山下亮介
 - (2) 房地古墳
 - ① 所在地 稲毛区宮野木町 1968-1 の一部他
 - ② 調査期間 平成 18 年 3 月 6 日～3 月 17 日
 - ③ 調査面積 76.4 m² / 707 m² (確認調査)
 - ④ 担当者 塚原原人
4. 整理作業及び本書の作成は、平成 19 年 4 月 1 日～5 月 31 日を行い、古谷涉が担当した。
5. 遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。遺物は青柳すみ江の協力を得て古谷が撮影した。
6. 土器の記載は長原亘の協力と助言を得た。
7. 出土遺物及び調査記録は、すべて千葉市埋蔵文化財調査センターに収蔵保管している。
8. 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課、千葉市都市局公園緑地部公園建設課

凡例

1. 本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。
2. 土層及び遺物の色を記号で示してある場合は、農林水産省監修「新版 標準土色帖」による。
3. 本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりであるが、各図中に縮尺を示してある。遺構実測図の縮尺は、古墳：1／100 積穴住居跡：1／60 土坑：1／60 である。遺物実測図の縮尺は、房地遺跡が、陶器復元：1／4 土器拓影：1／3 石器：2／3 である。房地古墳が、土器復元：1／4 土器破片：1／3 である。
4. 観察表の法量については、()付きの口径・底径は復元値を、器高は残存値を示す。
5. 第 1 図は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図により作成したものである。
6. 第 2 図は陸軍参謀本部作成の第 1 軍管地方二万分一迅速測図原図より作成したものである。
7. 図版中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

炉 

軸 

本文目次

例言・凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と遺跡の位置及び周辺遺跡.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 遺跡の位置及び周辺遺跡.....	1
第2章 房地遺跡.....	6
1 過去の調査の概要.....	6
2 検出された遺構と遺物.....	6
第3章 房地古墳.....	9
1 概要.....	9
2 検出された遺構と遺物.....	9
第4章 まとめ.....	16
1 房地遺跡.....	16
2 房地古墳.....	16
3 古墳時代の調査成果.....	16

写真図版

抄録

挿図目次

第1図 房地遺跡及び房地古墳の位置と周辺の遺跡.....	2
第2図 房地遺跡及び房地古墳の位置と周辺の遺跡（迅速図）.....	3
第3図 房地遺跡及び房地古墳地形図.....	5
第4図 房地遺跡トレンド及び遺構配置図.....	7
第5図 房地遺跡土坑・出土遺物実測図.....	8
第6図 房地古墳1号墳平面図.....	10
第7図 房地古墳1号墳土層断面図（1）.....	11
第8図 房地古墳1号墳土層断面図（2）及び1号住居跡実測図.....	12
第9図 房地古墳1号墳及び1号住居跡出土遺物実測図.....	14

写真図版目次

図版1 房地遺跡
図版2 房地古墳（1）
図版3 房地古墳（2）
図版4 房地古墳出土遺物（1）
図版5 房地古墳出土遺物（2）・房地遺跡出土遺物

第1章 調査に至る経緯と遺跡の位置及び周辺遺跡

1 調査に至る経緯

平成18年8月4日、千葉市都市局公園緑地部公園建設課から千葉都市計画事業稲毛北土地区画整理事業地内の公園用地（千葉市稲毛区宮野木町地内 面積 30,0001 m²）において（仮称）稲毛北公園の建設を計画するにあたり、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」の文書が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。

当該地については、土地区画整理事業に先立ち平成9年度に試掘を実施しており、千葉市教育委員会生涯学習部文化課はその結果に基づき、平成19年2月22日付けで旧石器、縄文、弥生、古墳時代の包蔵地、集落跡1ヶ所（房地遺跡 面積 7,638 m²）、古墳1基（房地古墳 面積 707 m²）が所在する旨を回答した。

その後、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、墳丘が現存する房地古墳については古墳の規模・性格等を確認した後、公園内に現状のまま保存して整備することが決定し、房地遺跡についても遺跡の規模・性格を確認した後、園路整備などにより埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について記録保存の措置を講じることとなった。

発掘調査は財団法人千葉市教育振興財團に委託し、房地古墳の確認調査を平成18年3月6日から平成18年3月17日まで、房地遺跡の確認・本調査を平成18年6月8日から平成18年9月29日まで実施した。（千葉市教育委員会生涯学習部生涯学習振興課）

2 遺跡の位置及び周辺遺跡（第1・2図）

房地遺跡-1は汐田川流域の標高約22～23mを測る台地上に立地し、宮野木支谷の最奥部に位置している。房地古墳-2は東へ約100mの標高約24mを測る同一台地上に所在する。

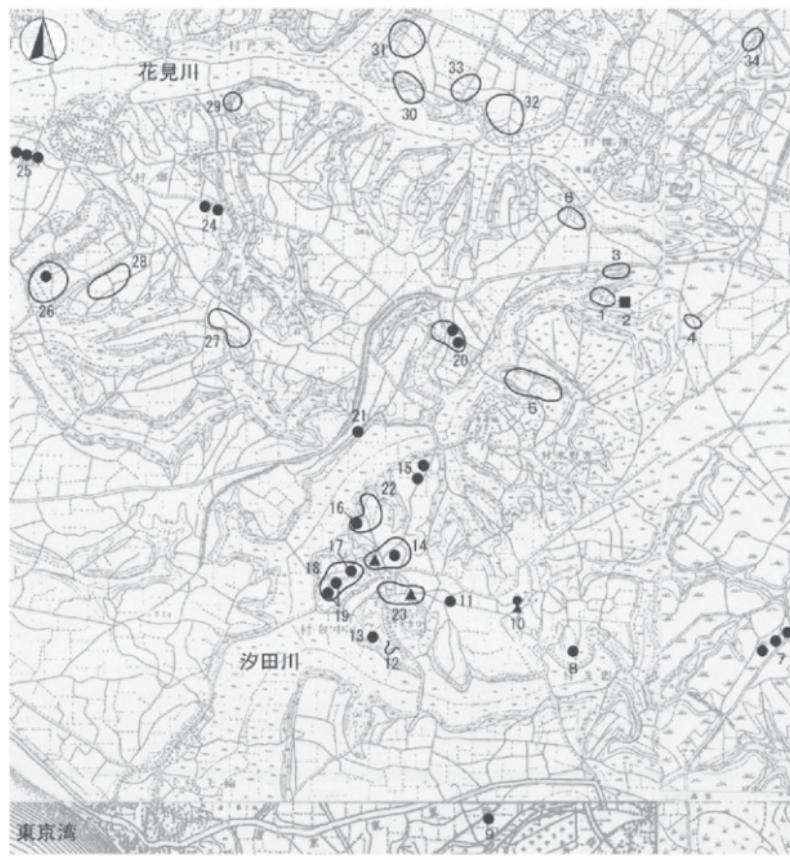
房地遺跡より北北東へ約100mの支谷を挟んだ台地上には房地北遺跡-3が所在している。昭和60年に千葉市教育委員会により「本郷向遺跡」として調査され、縄文土器と土師器が出土している。東南東へ約400mの谷最奥部には宮野木境第1遺跡-4が所在する。平成14年に（財）千葉市文化財調査協会により調査され、旧石器時代のナイフ形石器を伴う石器群と、縄文時代草創期の尖頭器を中心とした石器群が出土している。南西へ約500mには昭和55年に調査された定原遺跡-5が所在する。縄文時代中期末葉の土坑4基、奈良・平安時代の住居跡59軒、掘立柱建物跡10棟、土坑4基が検出されている。北北西へ約500mには本郷向遺跡-6が所在する。本郷向遺跡は昭和55年に千葉市遺跡調査会により調査され、弥生時代中期後葉の住居跡が1軒、古墳時代前期の住居跡が6軒検出されている。これらの遺跡は汐田川流域と花見川流域の分水界周辺に所在する。

房地遺跡や房地古墳の所在する汐田川流域には数多くの古墳が点在している。南南東約2kmには勝田台古墳群（円墳5基）-7、南約1.9kmには高崎古墳群（円墳3基）-8、南約2.8kmには向原古墳（地下式石室をもつ円墳）-9、南南西約1.6kmには西街道古墳（前方後円墳か？）-10、南南西約1.8kmには道合古墳（石室をもつ円墳）-11、南南西約2.1kmには城山横穴（横穴墓）-12、



- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 房地遺跡 | 11. 道合古墳 | 21. 鳩原古墳群 | 31. 内野山遺跡 |
| 2. 房地古墳 | 12. 城山横穴 | 22. 牛尾外遺跡 | 32. 米之内遺跡 |
| 3. 房地北遺跡 | 13. 城山古墳 | 23. 東ノ上貝塚 | 33. 西妻遺跡 |
| 4. 宮野木境第1遺跡 | 14. 小中台A遺跡 | 24. 陣屋台古墳群 | 34. 篠辺北遺跡 |
| 5. 定原遺跡 | 15. 宮野木原古墳群 | 25. 子安古墳群 | |
| 6. 本郷向遺跡 | 16. 牛尾列古墳 | 26. 殿山遺跡 | |
| 7. 謝田台古墳群 | 17. 牛尻古墳 | 27. 箕輪遺跡 | |
| 8. 高崎古墳群 | 18. 小中台B遺跡 | 28. 上鶴牧遺跡 | |
| 9. 向原古墳 | 19. 塚原古墳群 | 29. 次山遺跡 | |
| 10. 西街道古墳 | 20. 草原古墳群 | 30. 内野山南遺跡 | |
- 円墳
■ 方墳
● 前方後円墳
△ 横穴墓
▲ 貝塚

第1図 房地遺跡及び房地古墳の位置と周辺の遺跡



- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 房地遺跡 | 11. 道合古墳 | 21. 鳩原古墳群 | 31. 内野山遺跡 |
| 2. 房地古墳 | 12. 城山横穴 | 22. 牛尾舛遺跡 | 32. 米之内遺跡 |
| 3. 房地北遺跡 | 13. 城山古墳 | 23. 東ノ上貝塚 | 33. 西妻遺跡 |
| 4. 宮野木境第1遺跡 | 14. 小中台A遺跡 | 24. 陣屋台古墳群 | 34. 篠辺北遺跡 |
| 5. 定原遺跡 | 15. 宮野木原古墳群 | 25. 子安古墳群 | |
| 6. 本郷向遺跡 | 16. 牛尾舛古墳 | 26. 殿山遺跡 | |
| 7. 勝田台古墳群 | 17. 牛尻古墳 | 27. 箕輪遺跡 | |
| 8. 高崎古墳群 | 18. 小中台B遺跡 | 28. 上鶴牧遺跡 | |
| 9. 向原古墳 | 19. 塚原古墳群 | 29. 次山遺跡 | |
| 10. 西街道古墳 | 20. 草原古墳群 | 30. 内野山南遺跡 | |
- 0 1:25000 1km
- 円墳
■ 方墳
▲ 前方後円墳
△ 横穴墓
△ 貝塚

第2図 房地遺跡及び房地古墳の位置と周辺の遺跡（迅速図）

南南西約 2.1km には城山古墳（円墳）－13、南西約 1.8km には小中台 A 遺跡（円墳 2 基）－14、南西約 1.3km には宮野木原古墳群（円墳 2 基）－15、南西約 1.8km には牛尾舛古墳（円墳）－16、南西約 1.9km には牛尻古墳（円墳）－17、南西約 2 km には小中台 B 遺跡（円墳）－18、南西約 2 km には塙原古墳群（円墳 2 基）－19、西南西約 0.8km には草原古墳群（円墳 2 基）－20、西南西約 1.4km には鳩原古墳群（円墳 4 基）－21 が所在する。

また、古墳時代前期の集落遺跡も存在している。南西約 1.8km には牛尾舛遺跡－22、小中台 A 遺跡－14、東ノ上貝塚－23 が隣接して所在する。

一方、花見川流域にも古墳が点在している。西北西約 2 km には陣屋台古墳群（円墳 2 基）－24、西北西約 3 km には子安古墳群（円墳 3 基）－25、西約 2.9km には殿山遺跡（円墳）－26 が所在する。

また、古墳時代前期の集落遺跡や包蔵地も数多く点在している。西約 2.1km には箕輪遺跡－27、西約 2.5km には上鶴牧遺跡－28、西北西約 2.1km には次山遺跡－29、北西約 1.5km には内野山南遺跡－30、北西約 1.8km には内野山遺跡－31、北西約 1 km には米之内遺跡－32、北西約 1.3km には西妻遺跡－33、北東約 1.6km には蓮辺北遺跡－34 が所在する。

＜参考文献＞

『定原遺跡』 1982 千葉市遺跡調査会

『本郷向』 1982 千葉市遺跡調査会

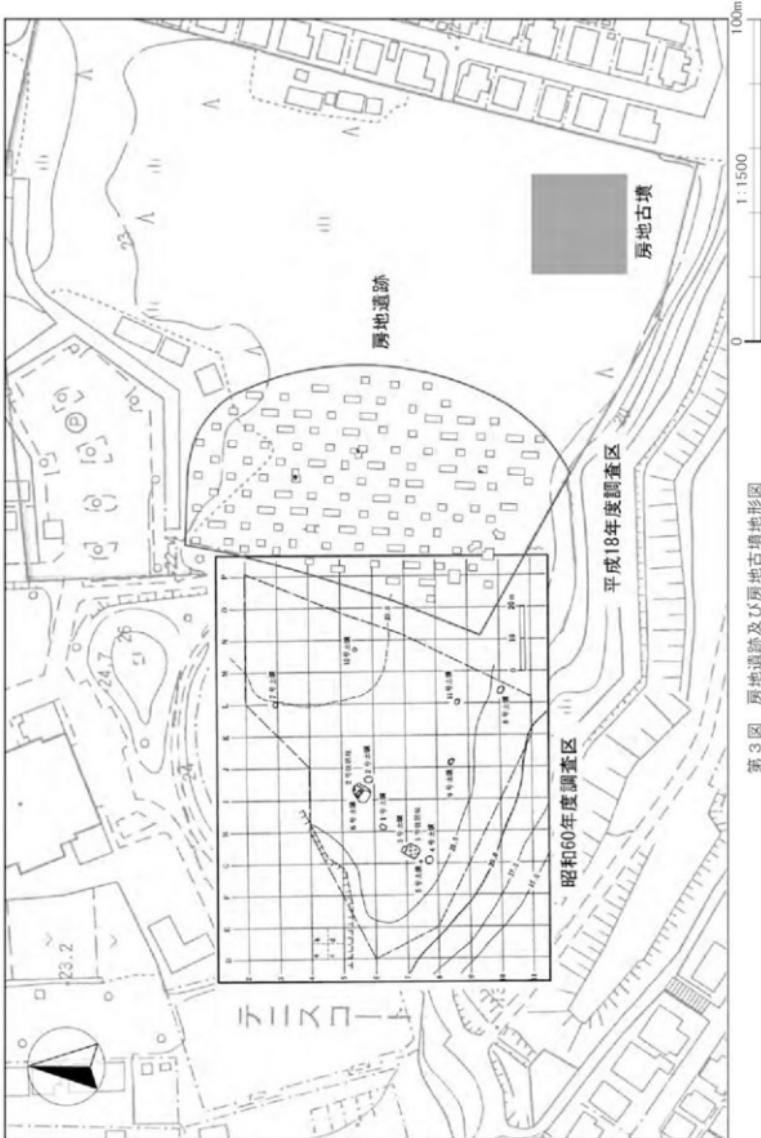
『千葉市 子和清水遺跡 房地遺跡 一枚田遺跡』 1987 （財）千葉市文化財調査協会

『千葉市 小中台 A 遺跡・牛尾舛遺跡』 1997 （財）千葉市文化財調査協会

『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）一千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』 1999 千葉県教育委員会

『平成 14 年度千葉市遺跡発表会要旨』 2003 （財）千葉市教育振興財团

『埋蔵文化財調査センター年報 15－平成 13 年度－』 2003 （財）千葉市教育振興財团



第3図 房地遺跡及び房地古墳地形図

第2章 房地遺跡

1 過去の調査の概要

昭和60年7月17日～12月12日まで調査が行われ、昭和62年3月に報告書が刊行されている。確認調査では「本郷向遺跡」として調査が行われたが、本調査では「房地遺跡」に改めて実施した。I区からは縄文時代前期後半（浮島式期）及び中期後半（加曾利E式期）の住居跡2軒、土坑11基（うち陥穴3基）が検出され、II区からは近世以降の構2条が検出された。また、I区包含層中からは旧石器時代の彫器、縄文時代草創期の尖頭器、縄文時代前期後半・中期後半・後期前半・後期後半・晩期中葉～晩期末の土器・石器・石製品、弥生時代中期の土器・石器、古墳時代前期の土器が出土している。縄文時代前期後半・中期後半は住居跡に関連した遺物だと考えられる。縄文時代晩期中葉～晩期末、弥生時代の遺物集中区が検出された点と、弥生時代の玉類や砥石が出土している点が特徴である。

2 検出された遺構と遺物（第5図）

今回の調査では縄文時代土坑3基（うち陥穴が1基）が検出されたが、遺物は出土していない。調査区からは縄文土器（早期・前期）、片岩製打製石斧1点、奈良・平安時代の土師器、中世以降の陶器が出土した。

基本層序は以下のとおりである。

I層：表土層 7.5YR3/4 暗褐色

II a層：暗褐色土層 7.5YR3/3 暗褐色 ローム粒微 柔らかい

II b層：褐色土層 7.5YR4/3 褐 ローム粒 ややしまり粘性がない

II c層：漸移層 7.5YR4/4 褐 ローム粒やや多

III層：ソフトローム層

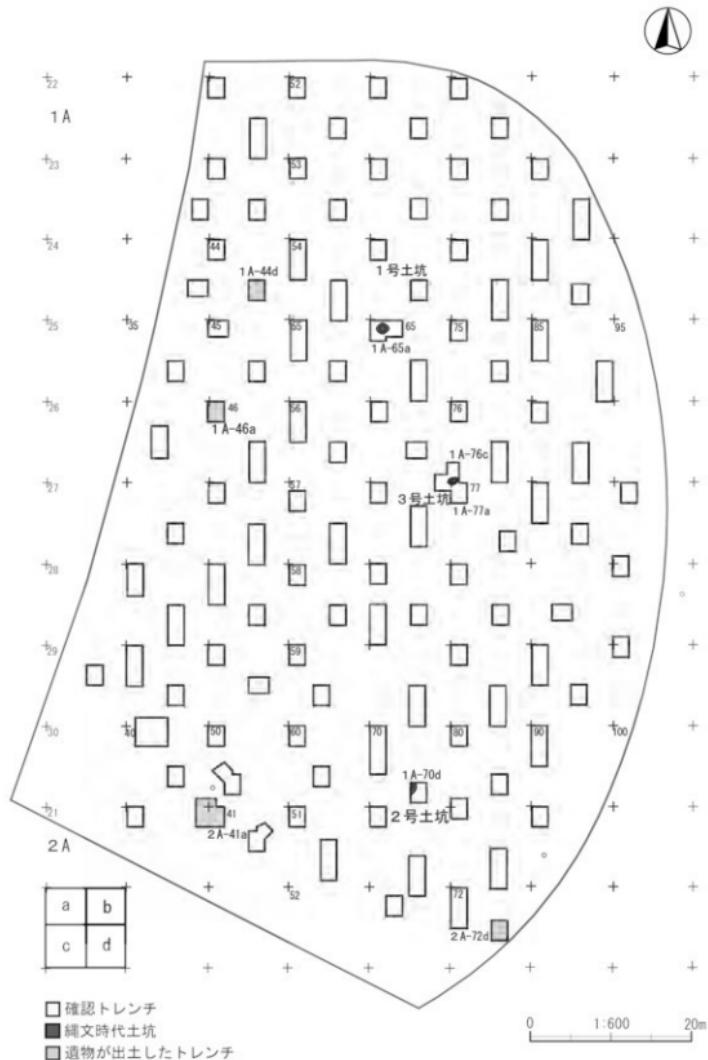
IV層：ハードローム層

1号土坑：1 A-65aに位置し、長さ1.3m×幅1.1m×深さ0.2mの楕円形で、遺物は出土していない。

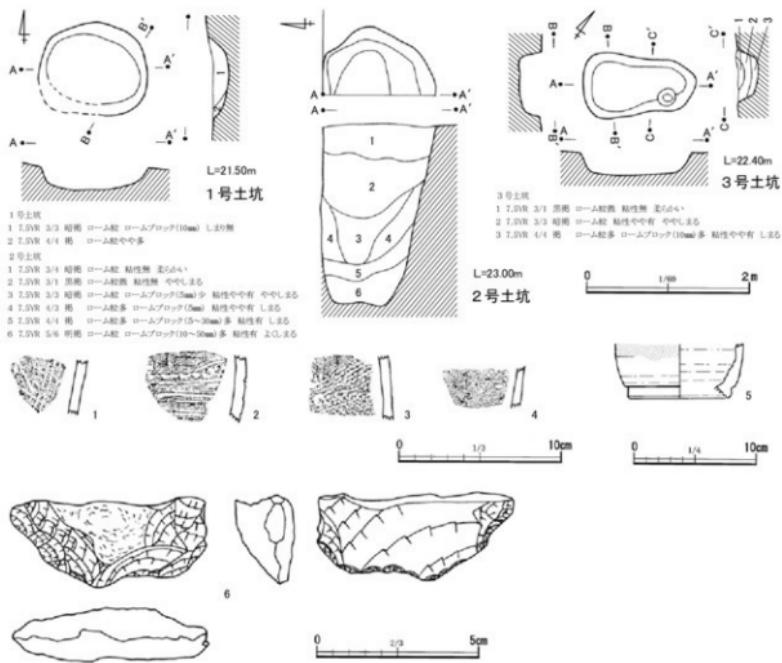
2号土坑：1 A-70dに位置し、長さ1.3m×幅1.1m×深さ2.2mで、遺物は出土していない。部分しか調査されていないが、楕円形の陥穴であると考えられる。II b層を切って構築され、IIa層に覆われている。

3号土坑：1 A-76c・77aに位置し、長さ1.4m×幅0.8m×深さ0.3mの変形した楕円形で、ピット状の落ち込みが存在する。遺物は出土していない。

出土遺物：1は1 A-44dで出土した縄文時代早期後半の条痕文系土器で、外面に条痕が施されているが、内面には施されていない。色調は外面が10YR5/4にぶい黄褐色、内面が10YR5/2灰黄褐色、断面が10YR3/1黒褐色である。胎土は小さ目の石英と長石を少し含む。2は1 A-44dで出土した縄文時代前期後半の土器で、半截竹管状工具による沈線と押引文が施されている。植房式と考えられる。



第4図 房地遺跡トレンチ及び造構配置図



第5図 房地遺跡土坑・出土遺物実測図

色調は外面が 10YR4/1 暗褐色、内面が 5YR5/4 にぶい赤褐色、断面が 7.5YR5/3 にぶい褐色である。胎土は大き目の石英と長石をやや多く含む。3 は 1 A-47 a で出土した縄文時代前半期の土器で、繊維は入っておらず、LR 繩文が施されている。その他に縄文土器が数点出土しているが、型式認定はできなかった。内面に炭化物が付着している。色調は外面が 5YR5/4 にぶい赤褐色、内面が 5YR5/3 にぶい赤褐色、断面が 5YR5/6 明褐色である。胎土は小さ目の石英と長石を少し含む。4 は 2 A-72 d で出土した奈良・平安時代の土器破片で、外側ナデ整形されている。外側に炭化物が付着している。色調は外面が 7.5YR5/2 灰褐色、内面が 7.5YR5/4 にぶい褐色、断面が 7.5YR5/3 にぶい褐色である。胎土は小さ目の長石と径 2~5mm 程度の赤色スコリアを少し含む。5 は 1 A-46 a で出土した中世以降の陶器の底部で、内面は自然釉で、外側に釉薬がかかっている。色調は外面が 10YR4/6 暗褐色、内面が 10YR8/4 浅黄褐色、断面が 2.5YR8/2 灰白色である。残存高 4.5 cm × 底径 (8.2) cm、残存度は底部 1/6 である。6 は 2 A-41a で出土した片岩製打製石斧の刃部破片である。色調は N4/灰色である。残存長 2.8 cm × 残存幅 6.1 cm × 残存厚 1.8 cm × 重さ 29.9 g である。

第3章 房地古墳

1 概要

今回の調査の目的は周溝確認と墳丘現況実測図の作成であるため、1号墳の現墳丘頂から放射状にトレンチを設定した。調査の結果、全てのトレンチから周溝が検出された。本古墳は円墳と考えられていたが、南東の4トレンチと南西の6トレンチから墳丘隅角が検出され、1号墳は方墳であることが判明した。周溝内からは古墳時代初頭の土器が多数出土した。

また、北東の2トレンチからは1号墳に先行する竪穴住居跡1軒（1号住居跡）が検出され、床面から古墳時代初頭の土器が出土した。

2 検出された遺構と遺物（第6～9図）

基本層序はI層：現表土層、IIa層：黒褐色土層、IIb層：暗褐色土層、IIc層：漸移層、III層：ソフトローム層、IV層：ハードローム層である。

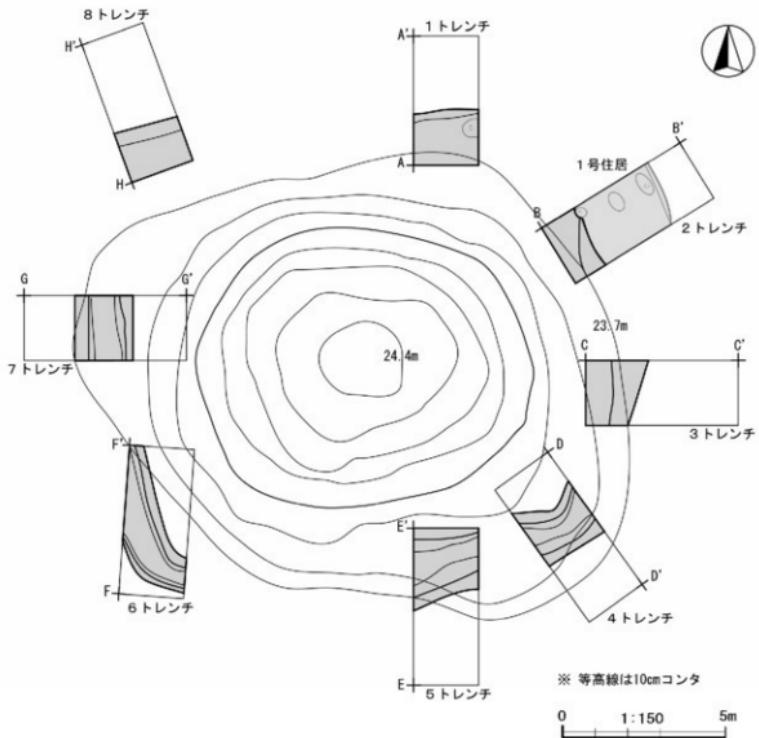
1号墳：周溝は人為的なものではなく、自然堆積であると考えられる。南西の6トレンチの周溝内からは土器（第9図-4・15）がまとまって出土している。1号墳の周溝はIIb層を切って構築され、IIa層に覆われている。

1号住居跡：2トレンチから検出され、1号墳の周溝によって切られていることから、1号墳より時期が遡ると考えられる。また、床面から古墳時代初頭の土器（第9図-1・2・3）が出土していることから、当該期に構築・廃絶されたと考えられる。2トレンチからは1号住居跡のピットが2基と炉が検出されている。1号住居跡はIIb層を切って構築され、IIa層に覆われている。なお、北の1トレンチからもピットが検出されているが、別の住居跡のものである可能性が高い。

出土遺物：土器の胎土には5種類のパターンが認められた。石英、長石を多く含む（A）は耐火性を高めるために煮沸用の甕に用いられている。一方、（B）は貯蔵用の壺に、（C）は供獻用の高杯に用いられている。（A）・（B）・（C）は機能・用途の差と考えられる。（D）が用いられている壺は搬入品と考えられ、産地による差と考えられる。（E）は台付甕と鉢に用いられている。台付甕は器面調整が丁寧なため石英、長石はそれほど目立たないが、鉢は器面調整が粗雑なため石英、長石が目立っている。これらの土器は1号住居跡がある2トレンチから出土しており、時期差の可能性が考えられる。

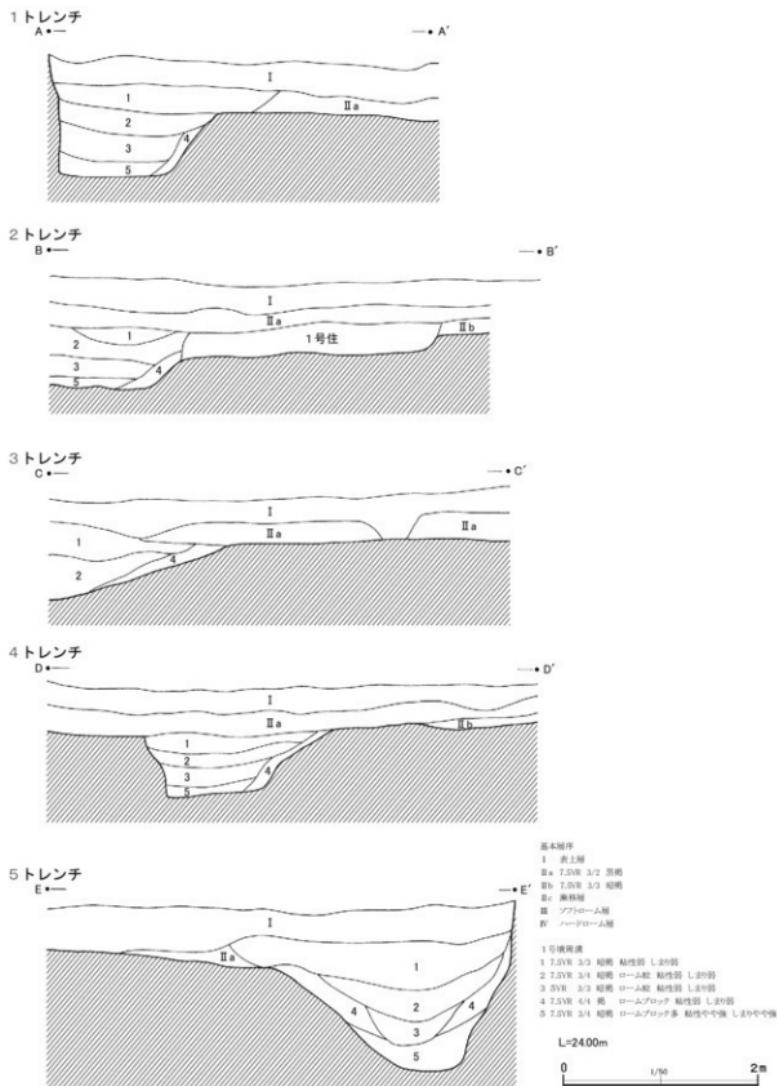
1は鉢で、2トレンチの1号住居跡内から出土している。口径 10.8 cm、胴部最大径 11.8 cm、底径 5.0 cm、器高 7.0 cm で、ほぼ完全に残存している。口縁部外面がヨコナデ調整で、胴部内面はナデ調整、胴部外面と底部は粗雑なヘラケズリ調整である。底部付近の内外面に黒斑がある。色調は外面が 2.5YR4/6 赤褐色、内面が 2.5YR4/8 赤褐色、断面が 7.5YR5/6 明褐色である。胎土は大き目の石英、長石をやや多く含む（E）。

2は台付甕で、2トレンチの1号住居跡内床面から出土している。口径 20.6 cm、胴部最大径 21.6 cm、残存高 19.5 cm で、口縁部と胴部がほぼ完全に残存し、台部が欠損している。小波状の口縁部にハケ状工具による刻み目を施し、胴部外面と口縁部内面はハケ調整である。外面 90° の位置に黒斑が 2

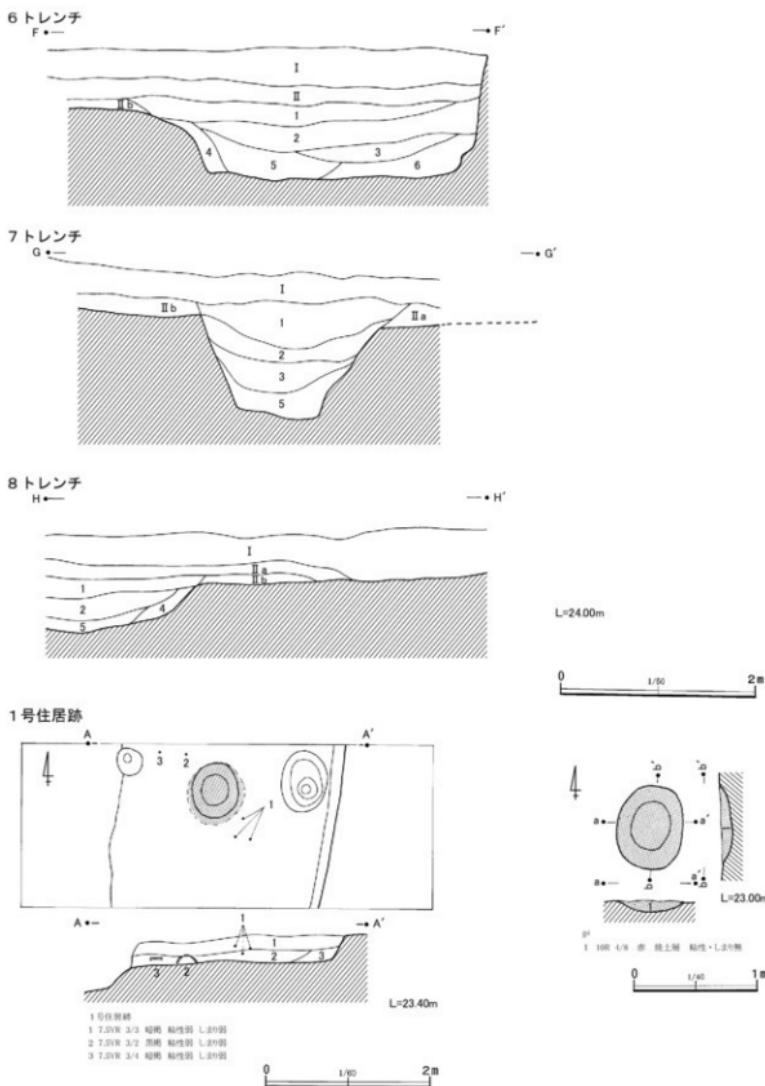


第6図 房地古墳1号墳平面図

カ所ある。内面全体と口縁部外面に炭化物が付着している。色調は外面が2.5YR4/6赤褐色、内面が7.5YR3/1黒褐色、断面が5YR5/4にぶい赤褐色である。胎土は大き目の石英、長石をやや多く含む(E)。3は台付甕で、2トレンチの1号住居跡内床面から出土している。口径(24.0)cm、胴部最大径(26.0)cm、器高27.3cm、底径9.4cmで、口縁部が1/6、胴部が1/3、台部が完全に残存している。小波状の口縁部にハケ状工具による刻み目を施し、口縁部へ胴部外面と台部外面、口縁部内面と台部内面下半はハケ調整である。胴部内面と台部内面上半はナデ調整である。胴部下半と胴部と台部の結合部分に輪積痕がみられる。胴部内外面に黒斑が1カ所ある。底辺部内面に炭化物が付着している。色調は外面が2.5YR4/8赤褐色、内面が2.5YR4/6赤褐色、断面が7.5YR5/6明褐色である。胎土は大き目の石英、長石をやや多く含む(E)。2と3は口縁湾曲部分の断面がやや「く」の字状を呈しており、新しい様相を示すことから古墳時代初頭に位置付けられる。胴部最大径と器高の比率がほぼ1:1にな



第7図 房地古墳 1号埴土層断面図(1)



第8図 房地古墳 1号埴土層断面図(2) 及び 1号住居跡実測図

るややすぼまった胴部や、ハケ調整から南武藏系と考えられるが、胎土は在地のものである可能性が高い。

4は長頸壺で、6トレンチの周溝から出土している。口径 15.0 cm、胴部最大径 27.6 cm、器高 32.7 cm、底径 9.0 cmで、胴部が一部欠損している他はほぼ完全に残存している。頸部外面はヘラケズリー→ヘラナデ→ヘラミガキ、胴部外面はヘラケズリー→ヘラナデ→粗いヘラミガキ、底辺部外面はヘラケズリー粗いヘラナデ調整である。頸部内面はヘラナデ→ヘラミガキ、胴部から底部内面はヘラナデ調整である。胴部下半に輪積痕がみられ、外面が赤色塗彩されている。外面 90°の位置に黒斑が2ヵ所あり、底辺部外面に炭化物が付着している。色調は外面が 2.5YR4/6 赤褐色、内面が 7.5YR6/6 橙色、断面が 10YR6/4 にぶい黄褐色である。胎土は小さ目の石英、長石をやや多く含む（B）。

5は壺で、8トレンチから出土している。口径 (19.4) cm、残存高 (9.6) cmで、口縁部が 1/8、頸部が完全に残存している。口縁部は複合口縁を呈し、頸部内外面はヘラケズリー→ヘラミガキ調整である。色調は外面が 7.5YR7/4 にぶい橙色、内面が 5YR6/6 橙色、断面が 7.5YR6/4 にぶい橙色である。胎土は小さ目の石英、長石をやや多く含む（B）。

6は壺の口縁部破片で、1トレンチから出土している。口径 (14.0) cm、残存高 (3.5) cmで、口縁部が 1/8 残存している。口縁部は複合口縁を呈し、頸部内外面はヘラナデ→ヘラミガキ調整である。内面が黒色を呈している。5・6は弥生時代後期の装飾壺に系譜がたどれる土器である。色調は外面が 10YR7/4 にぶい黄橙色、内面が 5Y3/1 オリーブ黒色、断面が 10YR6/4 にぶい黄橙色である。胎土は小さ目の石英、長石をやや多く含む（B）。

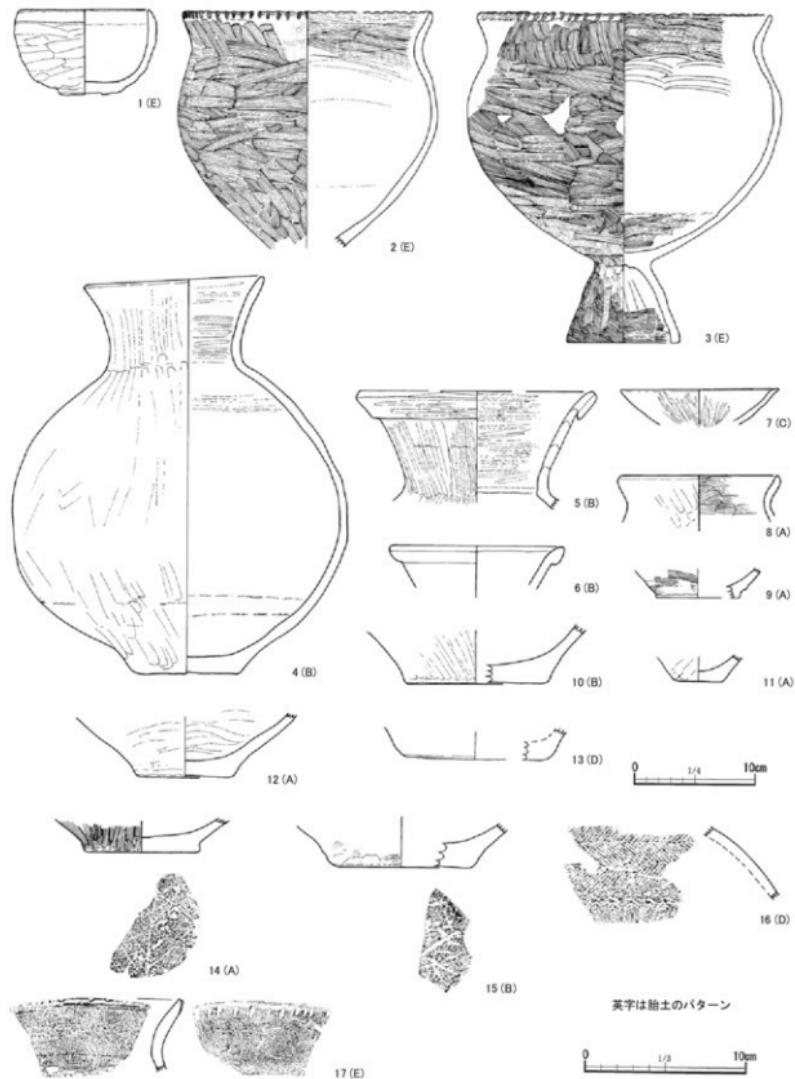
7は窯の口縁部破片で、1トレンチから出土している。口径 (13.0) cm、残存高 (3.8) cmで、口縁部が 1/8 残存している。口縁部内外面はヘラミガキ調整である。外面が赤色塗彩されており、内面が黒色を呈している。色調は外面が 2.5YR5/6 明赤褐色、内面が 7.5YR2/1 黒色、断面が 10YR5/3 にぶい黄褐色である。胎土は大き目の石英、長石を少し含む（C）。

8は甕の口縁部破片で、7トレンチから出土している。口径 (13.0) cm、残存高 (3.3) cmで、口縁部が 1/8 残存している。口縁部外面はヘラナデ、口縁部内面はハケ調整である。口縁部外面に炭化物が付着している。色調は外面が 5YR6/6 橙色、内面が 5YR5/6 明赤褐色、断面が 5YR5/4 にぶい赤褐色である。胎土は大き目の石英、長石を多く含む（A）。

9は甕の底部で、3トレンチから出土している。底径 (7.0) cm、残存高 (2.3) cmで、底部が 1/4 残存している。外面はヘラナデ→ハケ調整、内面と底部はヘラナデ調整である。底部外面に炭化物が付着している。色調は外面が 10YR5/4 にぶい黄褐色、内面が 5YR4/6 赤褐色、断面が 5YR5/4 にぶい赤褐色である。胎土は大き目の石英、長石を多く含む（A）。

10は壺の底部で、1トレンチから出土している。底径 (12.0) cm、残存高 (4.4) cmで、底部が 1/4 残存している。内外面と底部はヘラナデ調整である。色調は外面が 7.5YR6/4 にぶい橙色、内面が 10YR6/4 にぶい黄橙色、断面が 10YR5/4 にぶい黄褐色である。胎土は小さ目の石英、長石をやや多く含む（B）。

11は甕の底部で、8トレンチから出土している。底径 4.0 cm、残存高 (2.0) cmで、底部が完全に残存している。内外面と底部はヘラナデ調整である。底部外面に炭化物が付着している。色調は外面



第9図 房地古墳1号墳及び1号住居跡出土遺物実測図

が 10YR5/4 にぶい黄褐色、内面が 7.5YR6/6 橙色、断面が 7.5YR5/3 にぶい褐色である。胎土は大き目の石英、長石を多く含む（A）。

12 は甕の底部で、2 トレンチの 1 号住居跡床面から出土している。底径 7.8 cm、残存高（5.0）cm で、底部が完全に残存している。外面と底部はヘラケズリ調整、内面はヘラナデ調整である。底部外面に炭化物が付着している。色調は外面が 7.5YR5/4 にぶい褐色、内面が 5YR5/6 明赤褐色、断面が 7.5YR5/3 にぶい褐色である。胎土は大き目の石英、長石を多く含む（A）。

13 は壺の底部で、4 トレンチから出土している。底径（12.0）cm、残存高（2.4）cm で、底部が 1/8 残存している。外面はヘラナデ調整である。内面が剥落している。色調は外面が 10YR7/6 明黄褐色、内面及び断面が 5Y6/1 灰色である。胎土は大き目の石英、長石を極めて多く含む（D）。

14 は甕の底部で、3 トレンチから出土している。底径 7.0 cm、残存高（2.0）cm で、底部が 1/2 残存している。木葉痕が残されており、外面はハケ、内面はヘラナデ調整である。色調は外面が 7.5YR5/4 にぶい褐色、内面が 7.5YR6/4 にぶい橙色、断面が 7.5YR5/3 にぶい褐色である。胎土は大き目の石英、長石を多く含む（A）。

15 は壺の底部で、6 トレンチから出土している。底径（8.6）cm、残存高（2.5）cm で、底部が 1/4 残存している。木葉痕が残されており、外面はヘラケズリ調整である。色調は外面が 7.5YR7/6 橙色、内面が 7.5YR7/4 にぶい橙色、断面が 10YR6/4 にぶい黄橙色である。胎土は小さ目の石英、長石をやや多く含む（B）。

16 は壺の肩部破片で、4 トレンチから出土している。内面は剥落しており、羽状縦文と「S」字状結節文が施される。外面が赤色塗彩されている。色調は外面が 10YR7/6 明黄褐色、内面及び断面が 5Y6/1 灰色である。胎土は大き目の石英、長石を極めて多く含む（D）。胎土は異質であり、搬入品の可能性が高い。なお、16 は 13 と同じ 4 トレンチから出土しており、胎土及び内面剥落の状況が類似していることから、同一個体の可能性が高い。弥生時代後期の装飾壺に系譜がたどれるが、丸みを帯びる器形や出土状態から古墳時代初頭の遺物と判断した。しかし、弥生時代終末の可能性も捨てがたい。

17 は甕の口縁部破片で、2 トレンチの 1 号住居跡内から出土している。小波状の口縁部にハケ状工具による刻み目を施し、内外面はハケ調整である。2・3 の台付甕と類似している。色調は外面が 2.5YR4/8 赤褐色、内面が 2.5YR4/6 赤褐色、断面が 7.5YR5/6 明褐色である。胎土は大き目の石英、長石をやや多く含む（E）。

第4章　まとめ

1 房地遺跡

今回は昭和60年度調査区の東側を調査し、縄文時代の土坑（陥穴1基含む）が3基検出され、縄文土器（早期・前期）や打製石斧が出土した。これにより、縄文時代の遺跡範囲が東側へ広がる一方、縄文時代の集落範囲が限界を示すことが確認された。また、奈良・平安時代の土師器や中世以降の陶器が出土し、当該期の遺構が周辺に存在している可能性が指摘できる。

2 房地古墳

1号墳は円墳と考えられていたが、今回の調査では方墳であることが確認された。また、周溝内から古墳時代初頭の土器が出土し、時期が当該期であることが確認された。さらに、1号墳に先行する竪穴住居跡が1軒検出され、床面から古墳時代初頭の土器が出土した。これにより、房地古墳の構築以前に古墳時代初頭（前期）の集落が存在することも確認された。

3 古墳時代の調査成果

房地遺跡は古墳時代前期の包蔵地であり、房地古墳は近接する本郷向遺跡とともに古墳時代前期の集落遺跡である。これらの遺跡は沙田川流域と花見川流域の分水界付近に所在している。近世の開削以前には、花見川の中流付近に東京湾水系と印旛沼水系の分水界が存在していた。よって、これらの遺跡は東京湾水系と印旛沼水系をつなぐルート上に位置しており、交通の要衝を占めていることになる。

今回の調査成果により、交通の要衝にある遺跡としての、考古学的な裏付けをとることができた。房地古墳の1号住居跡から南武藏系の土器が出土しており、東京湾西岸地域との関連性が指摘できる。また、房地古墳の1号墳が円墳ではなく、方墳であることから、印旛沼南岸地域との関連性が指摘できる。

沙田川流域や花見川流域には数多くの古墳や古墳時代前期の集落が点在しており、遺跡群を形成しているものと考えられる。遺跡相互の関係や遺跡群の特徴を解明することは、千葉市域の古墳時代の歴史を考える上で、今後の課題となってくる。

写 真 図 版

房地遺跡

図版 1



調査前状況 1



調査前状況 2



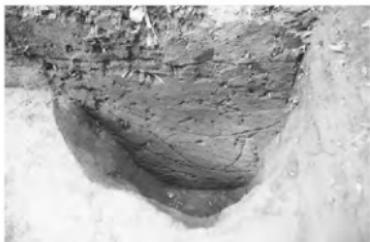
1号土坑全景 1



1号土坑全景 2



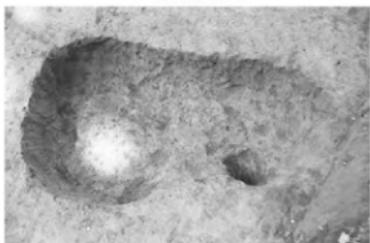
2号土坑全景 1



2号土坑全景 2



3号土坑全景 1



3号土坑全景 2

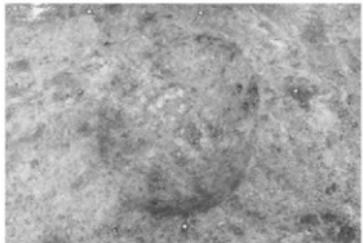
図版 2



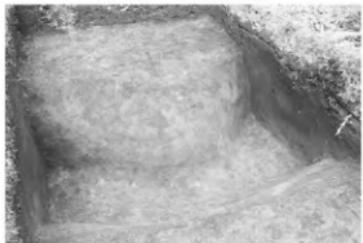
1 トレンチ周溝完掘状況



2 トレンチ遺物出土状況 2



2 トレンチ 1号住居跡炉



4 トレンチ周溝完掘状況 1

房地古墳（1）



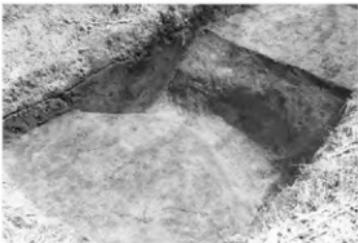
2 トレンチ遺物出土状況 1



2 トレンチ周溝完掘状況



3 トレンチ周溝完掘状況

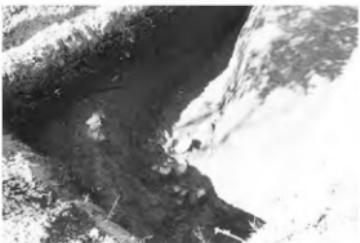


4 トレンチ周溝完掘状況 2

房地古墳（2）



5 トレンチ周溝完掘状況



6 トレンチ遺物出土状況 2



6 トレンチ周溝完掘状況



8 トレンチ周溝完掘状況

図版 3



6 トレンチ遺物出土状況 1



6 トレンチ遺物出土状況 3



7 トレンチ周溝完掘状況



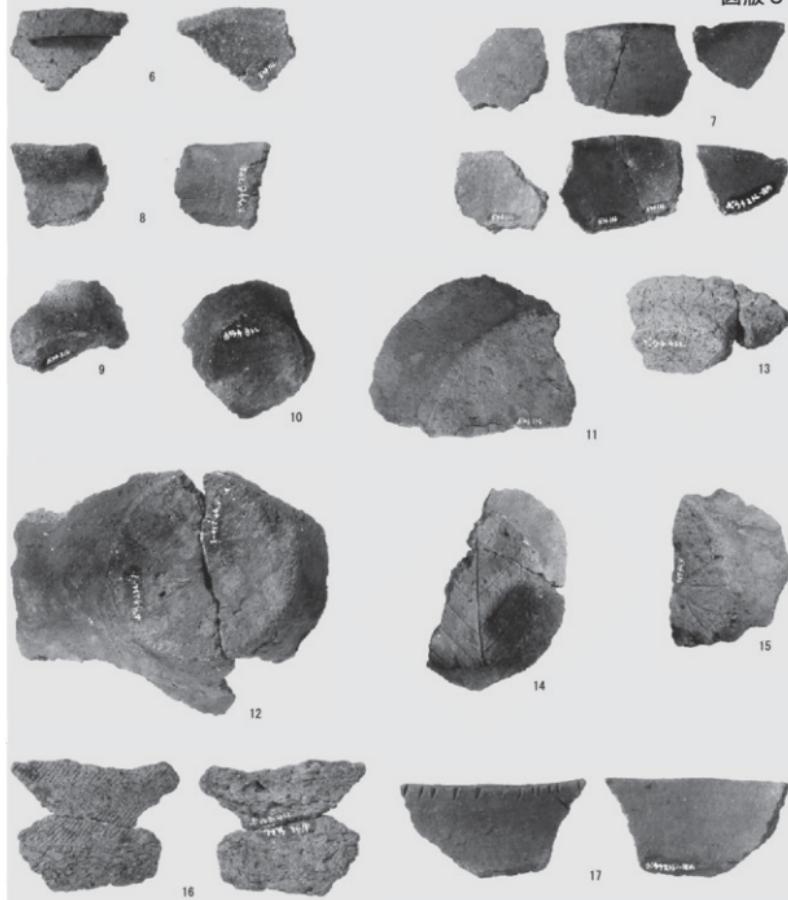
調査終了状況

図版 4

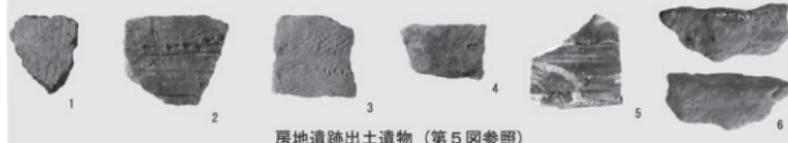


房地古墳出土遺物（1）（第9図参照）

図版 5



房地古墳出土遺物（2）（第9図参照）



房地遺跡出土遺物（第5図参照）

報 告 書 抄 錄

千葉市房地遺跡・房地古墳

－平成17・18年度－

平成20年3月31日発行

編集・発行 千葉市教育委員会

千葉市中央区問屋町1-35

財団法人 千葉市教育振興財団

埋蔵文化財調査センター

〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210

TEL 043-266-5433

印 刷 株式会社 ハシダテ

〒261-0002 千葉市美浜区新港116-1

TEL 043-243-3311